

今月の谷口雅春先生のお言葉

子供の言葉づかいかいや態度を良くするには

動作を丁寧ていねいに、表情を深切しんせつに

運命をよくするには常に善き言葉を使い、身体からだの動作を深切丁寧しんせつていねいにしなければなりません。丁寧にお辞儀じぎをしたら損そんをすとか、自分が相手より下のものだと思われはて恥はずかしいとか考えるのは間違まちがいです。世の中の人は、表情や身体からだを深切丁寧にする人をかえって、「あの人は偉い人だ」と賞ほめるのです。これに反して「あいつは馬鹿ばかだ、ろくろく言葉の使い方知らない、お辞儀をする術すべも知らない」と言いって人から軽蔑けいべつせられるのは、言葉使

いのぞんざいな人や、身体からだの動作に深切しんせつがあらわれていない人です。こんな人の運命はよくなりません。

〔『人生読本』262頁〕

優しい言葉づかいかいや美しい態度はすばらしい値打ち

世の中には学問も良くでき、立派な才能を有もちながら、運が悪くて、勤め先をあちらへ更かわり、こちらへ更かわり、しまいには落ちぶれて働く先もなくなるような人があります。そんな人はたいてい、気が短くて、言葉使しんいに深切せつがなく、身体からだの動作に礼儀正しさのない人です。

礼儀作法は女だけの習つものではありません。礼儀作法は男にも必要です。人間の値打を智慧や学問ばかりにあると思つのは間違です。尚それよりも態度の優美ということは、何よりも必要な人間の値打です。最初はどうかいう態度が美しいかは、鏡を見て稽古をなさるのもよろしい。どの程度に微笑する事が相手に気持のよい感じを与えるか、十分研究して置いて相手に快い気持を与える稽古をなさい。「そんな詰らないことを研究するよりも、本を読む方が偉くなる」とお考えになるかも知れませんが。しかしあなたがいくら偉くなっても、姿態はあなた自身の玄関のショーウインドーです。(中略)せつかく立派な才能を有しながらも、言葉態度に深切丁寧さがなくては、せつかくのよい御馳走を泥まみれにして出すのも同じことです。

(『人生読本』265～266頁)

「形」と共に「心」を深切にせよ

と言って、言葉態度の美しさは形ばかり真似ても、真

似ないよりはよろしいが、それだけでは本当に言葉態度が良くなりません。心に気品を持ち、心に優しさを持ち、心に深切を本当に持たないで、言葉や形ばかりを真似たのでは、どうしても嘘らしい空々しさが見え透いて人が感心するものではありません。何よりも必要なのは本当に深切な心持です。「あの人によい思いをさせてあげたい、あの人をよい気持にさせてあげたい、どんな人にも不快な気持をさせたくない。」こつこつという気持を持つように日々心掛けておれば自然に言葉態度が優しく深切に、誰にとつても気持がよくなれるのです。

(『人生読本』267頁)

子供を良くするには、まず親の言葉や行為から

子供はその本然の性質として模倣する性質をもっている。したがってかくせよと教えられることよりも、常に習慣的に他の人がしているのを見ていて、その通りをしよつという強い傾向をもっているのである。それゆえ

に、子供と接触する人は、子供にもたせたいと思う性質、行為、習慣等を自分の行為にあらわすようにしなければならぬ。

周囲の感化影響を短時日に蒙らない子供はほとんどないのである。だから孟母の三遷と云って、孟子の母が子供の教育のために三たび居をつつしたということ、近代の科学的な児童教養法にかなっているのである。

そもそも吾らが日常感覚にふれるところの事物は、それが如何なるものにもせよ、感覚器官という入口をくぐって、心の奥座敷まで這入ってしまい、心の奥座敷の住民となってしまうのである。だから成人でも環境をよくすることは必要だが、発育期、生長期にある児童にとつては、このことは尚一層必要なことである。環境にある一切の事物が幼い心にその姿を映す。心に映し込まれた姿は、一種の種子であって、すぐその時生えなくとも、やがて、その種子の発芽に適する条件が揃ってくれば生えて来るのである。秋、地に落ち散った雑草の種は冬

の期間は芽を出さないにしても、春が来れば芽を出すようなものである。だから吾らは子供の心に、秋のうちから雑草の種子をまいておいてはならないのだ。出来るならば、美しい花を開き、美味しい果実を結ぶような種子を蒔いておこうではないか。平和の種子、健康の種子、和合の種子、寛大の種子、自信の種子、深切の種子をこそ子供の心に蒔こうではないか。

この種子は、いわゆる現代の教育者がやっているような、本や教育的方法で詰め込み式に蒔いたからとて何にもならぬ。日常生活の子供の前で言葉や行為で実行して見せるに限るのである。だから子供を教育することは、教育者自身が教育されることになるのであって、教育者自身が言葉と行為とを洗煉するように日常心がけなければならぬのである。

(新編『生命の實相』第22巻129～131頁)